

# 追悼 武田武磨先生

門 脇 健

武田武磨先生が、二〇〇〇年四月二十九日早朝、急逝された。同年の三月に三十年余りの大谷大学での教員生活を退かれ、二年間の大谷大学哲学会会長という重責から解放されたばかりの出来事であった。

その哲学会会長としての二年間は同時に、ガンを抱えながらも【キリストンが見た真宗】にまとめられたユニークな比較宗教学を学生に教授し、また他方、先に「図録」として刊行された「大谷大学近代化百年の歩み」の本編をまとめるお仕事に情熱を傾けられた二年間でもあった。その死をも賭した熱意にガンも退散するのではないかと期待されていただけに、先生の突然の死は惜しまれてならない。

先生は、一九三四年に福岡市にお生まれになり、九州大学文学部を卒業後、大谷大学大学院で宗教学を専攻された。

ベルクソンやエリアーデなどのフランス語圏の学者・宗教学者の文献の解読を通じて、本学宗教学の伝統である神秘主義の研究に焦点をあわせた宗教思想史・比較宗教学を専門領域とされていた。しかし、先生の本領は、個人の研究を深めるというより、むしろ、多くの研究者の研究を「総合」し、まったく新しい切り口で事柄を明らかにする「編集」という場で發揮されたように思う。博綜館の研究室を構想したとき、シカゴ大学の様子を話しておられた先生の楽しそうな表情から察するに、先生が晩年に傾倒されていたエリアーデが創ったシカゴ学派のような「大谷学派」を夢見ておられたのかもしれない。

そのような先生の「総合」「編集」のお仕事は、九八年に真宗大谷派出版部から刊行された【キリストンが見た真

宗』、真宗総合研究所から出版された『図録・大谷大学近代化百年の歩み』によく現れている。両者とも、若い研究者を集め、彼らに伸び伸びと研究する場を確保しつつ、新鮮な切り口でその成果を発表するという先生独自の方法でなされた仕事である。

その『キリストンが見た真宗』について、先生はその「あとがき」で、「研究会そのものの願いは、…蓮如像と、蓮如時代の本願寺教團の動向を、新たな視点から求めることでした。」と述べられ、その研究をキリストン史料に基づいて進めたことは「その意図がどこまで可能か、まったく不明のまま出発したかなり無謀な試みであつたかも知れません。」と告白されておられる。しかし、この「無謀な試み」は、全く新しい蓮如時代の真宗を提示して、大きな反響を巻き起こし、新たな真宗研究・比較宗教学の可能性を切り開いたお仕事であった。さらに新たな史料を解説し、この研究の発展に意欲を見せておられただけに、先生の突然の死は惜しまれてならない。先生がお亡くなりになる前に、二刷の報が届けられ、それを喜んでおられたのが、今となつては、せめてもの慰めとなつた。

また、先生は学生部長とともに真宗総合研究所所長を二

期にわたって務められ、本学の研究教育の「総合」に力を尽くされた。その大谷大学に注がれた愛情は、余人の及ばぬ実に深くこまやかなものであった。その愛情の第一の果実が『大谷大学近代化百年の歩み』の図録編の編集であった。この図録の編集に当たつても、先生は、若い研究員が研究に集中できるように身を捨てて様々な困難を排除して下さった。そして、清沢満之の建学の精神が、視覚的に表現できるように、出版社の交渉から年表のチェックまで、あらゆる面に気を配りながら、このプロジェクト（先生独自の発音ではプロゼクト）をプロデュースして下さったのである。その本編の完成を待たず西帰されてしまつたことは、我々にとって計り知れない痛手であった。しかし、自分より他人を大切にする、多くの人に慕われたそのお人柄は、先生の残されたお仕事を、着実に完成に導いて下さっている。

ゼミでの先生は、学生の研究だけでなく生活上の問題にも文字通り親身に対応され、先生の研究室は様々な相談を持ち込む学生が後を絶たなかつた。退任される三月、卒業生たちは退任記念講演を楽しみに計画していたが、先生の体調がすぐれずついに実現できなかつた。告別式に全国か

ら集まつた卒業生たちは、もう一度あの「武田節」と呼ばれた名講義を聴きたかったという無念の想いを語り合つていた。

こうして見ると、先生の生涯は、実に大谷大学に捧げられた一生であった。それも、単に大谷大学の伝統を守るということではなく、常にラディカルな視点から大学を見直し、学生・若い研究者に伸び伸びと活動する時間・空間を提供していくといった、ご自身を前面に出すことなく事柄を進めて行かれる、実に大らかで潔い生き方であった。その生き方を真似るなどということは、私たちにはできないが、そのような先生の願いに報いのよう、今後の研究・教育を進めて行きたく思つております。